演題⑧

術中リンパ節転移診断の検討

宮崎社会保険病院　検査部
〇花牟禮 富美雄　　末川 智子　　野口 裕史

[目的]

早期癌においてはセンチネルリンパ節同定を応用した縮小手術も導入され，リンパ節転移の術中診断は郭清範囲を決定する上で重要である．しかし，凍結標本であるための影響や微小転移のために誤陰性になる場合がある．今回，術中診断の成績向上を目的に，当院材料を用い組織診断と捺印細胞診断の比較検討を行ったので報告する．

[対象と方法]

対象は 2000 年 1 月～2006 年 8 月までにリンパ節転移の術中凍結組織診断（以下，凍結）を行った 249 例中，同時に捺印細胞診（以下，捺印）を施行した 143 例（リンパ節 338 個）である．方法は凍結標本を作製する前にリンパ節を半割し捺印標本（Papanicolaou 染色 2 枚・Diff-Quik 染色 1 枚）を作製した．凍結後のリンパ節は通常通りホルマリン固定しパラフィン切片（ＨＥ染色）による組織診断（以下，パラフィン）を行った．

[結果]

338 個中、凍結・捺印・パラフィンともに(－)は 285 個であった．凍結・捺印・パラフィンともに(＋)は 49 個であった．この内の 1 個は，当初凍結(－)と思われたが，捺印で癌細胞を少数認めたため凍結標本を追加作製し極小さな転移を確認できた症例であった．凍結(＋)・捺印(＋)・パラフィン(－)は 2 個であった．この 2 個は微小転移であったため，パラフィン切片作成時の荒削りで癌の転移部が欠如したものと考えられた．凍結(＋)・捺印(－)・パラフィン(＋)は 1 個であった．この 1 個は捺印の再鏡検でも明らかな癌細胞を認めなかったが，免疫染色で Cytokeratin 陽性細胞を孤立散在性に認めた．凍結(－)・捺印(±)・パラフィン(＋)は 1 個であった．この 1 個はパラフィンでは孤立散在性に極少数の癌細胞を認めた．再検討を行った結果，凍結にも癌が疑わし細胞を極少数認め，捺印(±)とした極少数の異型細胞は癌細胞と思われた．

[まとめ]

凍結標本における微小転移の診断は，凍結によるアーチファクトや作製した標本面の違いにより誤陰性になる場合がある．捺印細胞診はパラフィン切片による診断とほぼ同程度の良好な成績が得られ，また細胞へのアーチファクトが少なく術中診断法として有用である．術中迅速診断においては，凍結診断と捺印細胞診の併用や，リンパ節の細切面を増やし複数の標本を作製することが重要と考える．